

上海体育学院との学術交流の報告

A Report on the Academic Exchange at Shanghai University of Sport

設楽佳世

Kayo Shitara

早稲田大学大学院スポーツ科学研究科

Graduate School of Sport Sciences, Waseda University

スポーツ科学研究, 7, 127-128, 2010年, 受付日:2010年12月25日, 受理日:2010年12月25日

2010年11月5～8日に、中国の上海体育学院との学術交流に参加した。今回の学術交流の主目的は、上海体育学院にて開催された「4th Shanghai International Forum on Exercise and Health」の「Sino-Japan Postgraduates Forum」にて、今年度のグローバル COE プログラムの研究成果について口頭発表を行うことであった。私は、グローバル COE プログラムのプロジェクト I「子どもの体力低下抑止と健全育成促進」で今年度実施した研究の成果について、「Estimation of percent body fat in children using a three-dimensional photonic image scanning technique」というタイトルで発表した。英語での口頭発表は昨年度グローバル COE プログラムの一環として行われた第 2 回国際シンポジウムに続き 2 回目であった。前回は英語の原稿を読む形で発表を行ったが、今回は可能な限り「原稿を読まずに話すこと」を目標とし、話すことを暗記して臨んだ。しかしながら、いざ本番になると緊張のあまり所々覚えた内容を忘れてしまい、完全に原稿に頼らず発表をすることはできなかった。口頭発表、特に英語での発表は、練習をすればするほど上達し、本番で自信を持って話すことができることは、これまでの経験から強く感じていた。今回自分の中で立てた目標が十分達成できなかったことは、自分なりに努力したもののまだまだ練習が足りなかったことの表れであると痛感している。このこと

は、今回の反省点であり、次回への新たな目標である。また、今回の発表にあたり最も不安であったことが、発表後の質疑応答であった。英語での質疑応答の機会は今回が初めてであり、まず英語での質問を聞き取れるか、仮に聞き取れたとしてもそれに対して英語で回答ができるのか、全く自信がなかった。実際に本番ではフロアーからの質問は出ず、座長の先生が質問をしてくださった。とてもゆっくり分かりやすい英語で話してくださったので、なんとか聞き取ることができたが、質問に対する回答として自分自身が伝えたいことを十分に伝えることができなかった。英語での質疑応答は、当日何を聞かれるのかはその場になってみないと分からないので発表とは違い事前に練習はできないが、まずは日常的に英語に触れ、英語でのコミュニケーションに対する恐怖心をなくすことが大切であると感じた。その意味で、今回の経験はその大切さを改めて強く感じさせる大変よい機会となった。さらに、発表に参加したフォーラムでは、上海体育大学から 5 名、早稲田大学から 5 名の博士課程の学生が発表した。自分と同じ立場の学生が、自身の研究について自信を持って発表し、質疑応答にも臆することなく堂々と対応する姿を見ることは、私にとっても大変よい刺激となった。

上海体育大学は、大規模なキャンパスを有しており、その中には複数の競技場が広がっていた。

また驚くべきことに、キャンパス内には博物館があり、そこには中国に昔から伝わる武術や上海体育大学が過去に輩出した著名なスポーツ選手に関するものが数多く展示されていた。施設案内の中では、バイオメカニクス分野の研究室にも訪問させていただいた。研究施設、機材は大変充実しており、その中には私の所属する早稲田大学のバイオメカニクス研究室で所有している動作解析システム、フォースプレート、筋力計、光学式スキ

ャナーなどと同じものもみられた。海外でも私たちと同じような分野で研究が行われていることを肌で実感することができた。

最後に、本交流の実現に多大なるご尽力をいただいた研究院助教の曹振波先生、あらゆる場面で温かくサポートしてくださった上海体育大学の諸先生方、大学院生の皆様に心よりお礼申し上げます。どうもありがとうございました。